

ほらくらべ（篠山町）

むかし、丹波〈たんば〉の多紀郡〈たきぐん〉の人と、摂津〈せつづ〉の伊丹〈いたみ〉の人とが、ほらの吹きやい（ふきあい）をはじめました。

まず、丹波の人が、「丹波には、三岳〈みたけ〉という高い山がある。その山のてっぺんに、三本の大竹がはえとって、冬になって雪が積もると、その竹がしわって、さきが丹後〈たんご〉の宮津〈みやづ〉の海につかる。春になって、雪がとけて竹が立つと、その葉に蛤〈はまぐり〉がぎっしりとついていて、三岳のてっぺんに蛤の山ができる。」

といばりました。すると伊丹の人は、「伊丹には酒屋がぎょうさん（たくさん）あって、そこには大きな酒たるがあって、その酒たるのまわりは、どのくらいかという、三里〈さんり〉から四里にもなる。」とやりかえしました。そこで、丹波の人が、「その酒たるの輪〈わ〉は、どうして作るか。」と問いかけましたら、ぐっとつまって、「そりゃ、丹波の三岳の竹で作る。」といったので、伊丹の人が負けたそう。



（兵庫の民話から）